

テニスプレーヤー が挑戦するゴルフ ファーへの転身



柴田商事社長
柴田 音吉

柴田さんは2年前まではテニスばかりやっていたスポーツマン。それがゴルフに転じるようになったのは、40歳を前にして体力の衰えを感じるようになったからだ。

「35歳を過ぎるとトーナメントを続けるのはしんどいし、ゴルフをしようというお誘いも増えてきたため、ゴルフを始めました」

今も母校の甲南大学で、テニス部のコーチをしている柴田さん。学生時代は関西学生ダブルス選手権に優勝、全日本学生では惜しくも準優勝という実績があり、現在までに103勝している。

ところがゴルフを始めた当時は、ウッドがまったくというほど当たらなかった。

最近ようやくゴルフのことがわかるようになりましたが、一時はテニスより簡単そうに見えるスポーツなのになぜ自分はゴルフがこんなに下手なんだろうかと悩んだことがあります」

どこが違うかという、ゴルフのほうが精神面のウェイトが高いことである。

「テニスに強くなるために大事なことはスタミナで、次に技術力とメンタルな要素が続きます。ところが一方のゴルフは、最初にメンタルな要素がきて、次に技術力、最後がスタミナ。

その違いを示すのがゴルフのOBです。一発でもOBを出したらパーが取れないように、どのショットも気が抜けないという、精神的なしんどさがあります」

その反面、またゴルフのほうが楽なところもあるそう。

「例えばテニスだと、自分の弱みは相手から徹底的に攻められますが、ゴルフの場合は自分が弱いところ、苦手なところは避けて通ることもできますからね。バンカーを避けるとか、リカバリーで無理をしないとか……」

もっとも、ゴルフについてこういう講釈ができるようになったのは、ようやく100を切るゴルフができ

るようになったからである。最初に100を切ったのは去年の11月だが、今年5月にはもう90を切ったこともあるように、アベレージで98ぐらいのスコアを出している。

ハンディキャップもこの1年の間にトントン拍子に上がってきていて、コンペで優勝することもある。25で出て、95で回ればネットで2アンダーになるからだ。

この夏、柴田さんは父親（会長・高明氏）の後を継いで社長に就任すると同時に、4代目音吉を襲名したが、その記念パーティーの翌日は、友人や取引先を招いてコンペを開催した。

「ドーム社の会長も出席され、ドーム・カップを提供していただきましたが、テニスと違ってゴルフは皆が一緒に楽しめるからいいですね。この日、私は主催者なので順位には顔を出しませんでしたが、ダブルペリア方式だとはいえ、シングルクラスが5人もいる60人のコンペで9位ぐらいのところにつけていました」

このところ急速に腕を上げているのは、テニスプレーヤーが陥りやすい右手打ちのクセを矯正しているからで、以前は速かったスイングも今はゆったりと打てるようになっている。

「難しいのは、テニスの後でゴルフをするとスイングがスウェーしやすいく。私の感じでは、ゴルフの後からテニスをするほうが、腰がよく回っていいような気がします」

柴田さんの当面の目標はボギーペース。課題はドライバーだが、これがよくなっているし、パットやアプローチは割と得意にしているので、年内には20ぐらいで勝負できるようになりそうだ。

寄せとパットがうまい理由は、その手加減がテニスのボレーに似ているからだ。ボレーは、反射神経とデリケートなタッチを必要とするが、そのテクニックがゴルフにも使えるのである。

「大学を卒業してロンドンのドーム社で修業していた時代、英国人に教えられたのが“プレー・スポーツ、ドリンク・スコッチ”というウエー・オブ・ライフです。私も、健全な肉体と健全な精神、そしてコミュニケーションの輪を広げる社交を大事にしていきたいと思います」という柴田さん。現在も、週に1回のテニスは欠かさず、体力を維持するために水泳も続けている。